

婦人と子ども

第八卷
第四號

フベール會發元

第八卷第四號目次

● 話の種子	下田次郎
● 歐洲に於ける幼稚園思想	エム、シー、オツシ
● 保育論上と於ける根本的二思想	和田實
● 育児の經驗	光藤泰次郎
● 如何にして美しく圓滿なる	
● 家庭は作らる可きか	白山生
● 女子教育に就きて	鹽野生
● 讀書の選擇	虚空子
● 此頃の料理	石井泰次郎
● 紀念の牛塚	川口孫次郎
● ウエレーとロイン	エ、コツク
● 短歌	鹽野奇零
● 泳ぎの太郎	なにがし

投稿募集

一種類 ● お伽話 本誌半ヶ年分以上三ヶ年分
 選擇の上本誌に載録せるものは
 一 一般記事 内規により原稿料を呈す

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取
 らずして其指定する人に本會より直接送ることを得
 一 注意 お伽話及一般は記事一行廿二字語にて半紙又は郵紙に書
 かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎
 月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に同はし何時迄も引續いて
 行く積りです。
 宛名は本會へ直接御送り下さい。
 開き封で應募原稿と標記すれば三十多迄は郵税二錢で参ります。

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する
 事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速
 に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年
 分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致
 します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會
 か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増

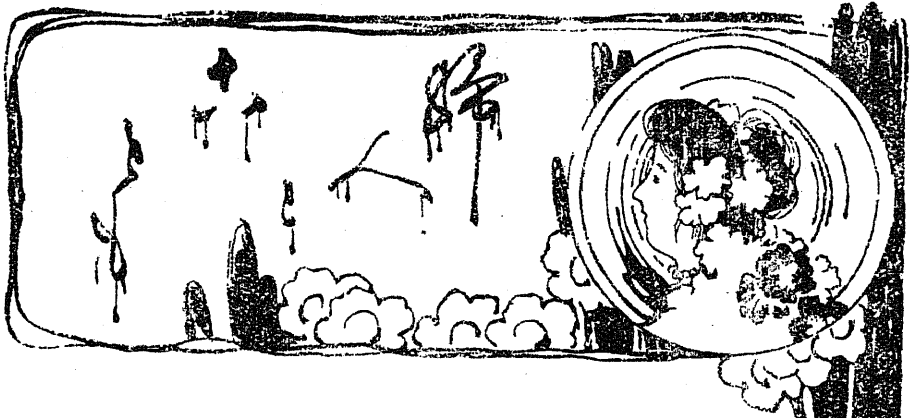
稟告

來る二十一日(火曜日)午後一時より女子
高等師範學校附屬幼稚園に於て本會第
十三回總集會開會致し候に付萬障御繰
合御出席下され度候

追而當日別室に參考品陳列致し度候に付會員諸君よりも
幼兒成績物其他御出品下され度願上候

明治四十一年四月

フ
レ
ー
ベ
ル
會



第八卷第四號

香子

話の種子

女高師教授 文部士 下田次郎

子供に好きなる事多し。取りわけ食へること、遊ぶことが最も好きなり。されど、これにもをさく劣らざる好きなることあり、話を聞くこと、則ちこれなり。話はこれに聞き入るときは、子供は食へることも忘るゝほどの好物なり。腹が減れば、食物を求むるが如く、心に何か欲しきときは、「お母さん何ぞお話を」とは、屢々子供より聞く言葉なり。膨の満足と共に、心の満足は與へざるべからず。然るに世の母には、子を育てるとして、食物の撰擇分量與へ方等につきては、一方ならぬ骨を折るに、子に聞かしむる話については、呆るゝほど平氣なる者少なからざるを訝かしけれ。口より入れる身體の食物が大切ならば、耳より入れる心の食物もまた大切にあらすや。身體にのみ結構なる滋養物を取らせて、心には、出鱈目の魚末千萬なる材料を

與へて、それで子を育てるといはるべきか。飯、肴、卵、牛乳等の常食物は勿論、煎餅、餅菓子より、むつかしき名の西洋菓子まで日頃蓄へかき、肉食にも不自由をさせぬほどの母親が、子に話をせがまれば、用意皆無のことゝて、素より話の出来ればこそ、よい加減の胡麻かしをいふて、心の滋養を取らしむべき折角の機会を殺して仕舞ふこそ、残念なれ。母の有つべきものは、着物にあらす、肩掛にあらす、子に聞かすべき話の種なり。

されど唯話の種と有ち居ることが結構とのみは云へず。話も品に依るものにて、下らぬ話ならば、腐るほど有ち居たりとて、却て有害にて、いつそ話のなき方が好なり。話すほどならば子供の爲になる良き話をせざるべからず。近來昔話お伽譚を始め、話の種本は澤山出来て、雑誌店繪草紙屋の店も賑ふほどなるが、何分にも平凡なる人間の倉末なる頭にて、一夜作りの出鱈目の作が多く、こんな話を謹聴せしめて、子供の清淨無垢なる大切の頭を汚すは、勿體なく情けなく思はるゝなり。

話せば、今少し氣の利きたる、意味ある話をせざるべからず。

凡そ國には言ひ傳へ聞き傳へたる話といふものあり。桃太郎、舌切雀、猿蟹合戦、花咲爺、竹取物語、浦島太郎の如きお伽譚、昔譚は、我が國傳來の話にて、先祖代々親は子に、子は孫に、恰も一家の身代を譲るが如く、日本國民無形の身代として代々に譲り傳へたるものにして、むづかしく言はれ親たるもの、心得、語り聞かすべき義務ある話といふも、大言にあらす。古事記は我國最古の書にして、我が國神代及び上古の事を記し、伯耆の白兔、入岐の大蛇退治、天の岩戸等、子供の喜んで聞く話多く、我等が祖先の氣象、抱負、經綸、建國の由來等を伺ふに足るべき話に満てるものなり。これらの話は、國民の承知しかくべきものにして、親の子に聞かすべき話なり。又我國は歴史古く、國民の誇りとすべし忠孝を始め、その他あらゆる美德の發現せる歴史上の代表的美談佳話に富む。此等のものは、代々話し聞かされたるのみならず、祭祀の本尊となり、芝居、活人形、



歐州に於ける幼稚園 思想 (承前)

米國 エム、シイ、オツシー

轉じて巴里を訪れた時には全く異つた状況を見出した。園内の様子は之をベルリンのに較べると頗る温和である、作業は彼等の様に嚴格でなく先生は教師と云ふよりは寧ろ幼児の友達と云ふ可きである。而して幼児をして如何に幸福ならしむべきかと云ふことに就ては彼等は獨乙の教師よりも一層深き注意を拂つて居る様である、ベルリンに於ては幼児をして従順ならしむること、學ばしむると云ふことが主として要求せられて居る、巴里に於ては此反對に教師は彼等の慈父慈母であつて彼等幼児の爲めに常に何等かの興味を與へんこと

を心掛けて居る可きものと云はれて居る。佛國に於ては體罰は法律上之を禁せられて居る。そして一般に體罰を用ゆべからざるものとして他に幾等も之に代はる相當な方法があつて教育上には決して不都合はないと云ふ考へを持って居る様である、予はフランスの學校の教室に然も兒童の面前に某種の體罰が禁せらるゝことの法文が掲げてあるを見たが教師は夫れが決して兒童の放縱の原因となる様なことはないと云ふのを聞いた。斯様な譯で佛國の幼稚園と云ふものは自然室内の空氣が之をベルリンのに比すると快活である、そして先生達は子供達の遊んで居るのをば悦ばし氣に見て居る、従つて學校に至つても或種のものは遊嬉的手段で教へられて居る、之に就いて面白い實驗があつた、忘れもしない、巴里のリセー、フェネロンでの英語の教授であつたが、生徒は何れも八九才ばかりで先生は生粹の巴里子で暫く英國に住居したことのある人だそなたが頗る巧みな發音で殆んど英人と區別しがたい程であつた、彼が教授の第一歩は遊戯として演ずる英語の動作唱歌を

教師の間に應じて答ふる方法であつた。生徒は非常に熱心で殆んど自然に自國語を收得する様な有様で英語をば學んで居つた、そして色々なものを叙述して居つたが中々熱心なものであつた。餘り生徒が熱心に且上手に英語を練つて居つたので予は自分の今巴里に居るのを暫くは忘れてしまつた位である、頓つての事に仕事は英語で指圖を與へる遊びとなつて教師の周到の注意の下に其時間中の全活動は悉く英語で支配された。そして發音の正確なものがあるが猶豫なく訂正して居つたがそれが一寸も遊を妨げる様なことはなかつた。斯くして遊びと稽古とが併行するので子供は眞に仕合で教師も亦頗る満足の様であつた、終りの十五分間は英語の讀み方と英國の傳説的童話の暗誦であつたが此暗誦中も生徒の働さがよんで教授が停滯する様なことはなかつた、従つて生徒が此時間を終つて室から出る時には入室の時よりも一層幸福で然も爽快な氣持を持つて居つた様である。此巴里の先生の教授は我幼稚園の根本原則を幾分勉學の上に調和して居る様に見えるので茲に態々引

用した次第である、實際巴里人は一般に幼稚園思想を以て兒童を管理し様として居るのである。佛國に於ては慈母學校と云つて二才半乃至五才の子供を管理するものがある、此次に来るのがエコール、インオアンテインで七才迄のものを教育することに於て居る、慈母學校と云ふのは其名の示すが如く貧民の憐れな子女に幸福な家庭生活を與へて遣らうと云うので教師は全幼兒の母の様なものである、併し意外のものは彼等は誠に能く緊張せられた人であるが、最近の幼稚園教育法と云ふものに就ては予の知る所の範圍内では殆んど無智の様に見えた、彼等の室には床上に作り付けになつた席がある、そして何等構作的の手法もなく況して吾等が幼稚園に常見る所の團樂の風は一寸もない、エコール、インフアンティに於ても矢張り同様に學校と云ふものは凡て唯僅の智識を授くることの外主として意思陶冶の場所の様である、故に或人は是等の幼稚園を見た後で吾米國式の幼稚園を見て大に賞賛して居る、勿論我等として何等の過なしと云ふ可からずだけれど吾等は常に致々と

保育論上に於ける 根本的二思想

和田 實

遊戯を利用して教育す可しと云ふことは幼稚園教育上に於ける従來の思想なり、現在も斯る見解を以て我幼兒教育を律して行かうと云ふ考を以て居る人は決して尠くない様であるが、是が果して正當な考であらうか吾人は之を疑ふものである、否吾人は是が従來の幼稚園教育に種々な弊害を醸した原因であると思ふのである、一体利用など、云ふ言葉はともすると廢物利用などの利用と云ふ言葉と同様に考へられるものであるから遊戯を利用して教育すと云へば遊戯と教育とは本來全く異つて居るもの無關係のものではあるが併し之を甘く用ゆれば教育的効力があるものであるからそこで教育に利用す可しであるといふ様に聞える、イヤ實際斯様に考へて居る人が尠くない様である、是は全く間違つた考と云はねばならぬ、此論録で行くと遊戯は本來教育的のものではないが之を利

用し遊戯の假面を被つて幼兒を瞞着することに因つて教育することが出来ることと云ふ様な議論になるから従つて此主義を奉ずる人から見ると遊戯的に教授することは幼稚園本來の仕事であるかの様に考へられ、従つてまた次の様な話は幼稚園に於て當然なざる可きもの、様に思つて居る人がある。

或處に早起きの子坊ちゃんがありました、此やうにはやく起きましたらきつとよい事がありましたやうと下婢も下男もほめて居ました、其御褒美に坊ちゃんの體は肥えて元氣よいつやうしたもつたなり他の小供が寒いといふ時でも「何にこれ位で日本の男子が」と風を切つて御遊びをしてすこしも寒い苦しいのつかれるなどいふ事がありません、それもその筈五ツの時から毎朝冷水に摩擦をしてもう日本帝國の御爲になり得らるる男子となりたといふ心が浸み込んで居りますから少しも苦情を云つて家の人を困らせる事なく何處までも快活な坊ちゃん、今朝は何か竹刀のかはりになる棒をさがしに物置へゆきました處が石炭と石炭と話をして居ました一方は黒いので一方は黒さも黒しヒカ／＼光る眞黒いので今丁度話をはじまりました處らしく、黒いのがあゝ君はなか／＼我々のなかまではえらひいくらたかれても苦情らしく煙なんが出さないからそれで水雷艇や何んか大事なもの、御用に立つのだなあ無煙炭君！
いやそんなに云ひ給ふるな黒炭君、君ほど世の中に向つて役に立つて居るものはないではないか近頃のやうに寒くなればスト

トプにつかはれて人間が大喜び、汽車や汽船を動かす原動力になり、君のために國の文明を開かれ地球の上も雑作なくあるく事が出来、人間は伶俐になりとかくわれ〜よりは君達の多い方がよいやうだが奇妙だね各國の文明の程度はわれ〜の出したの多い少ないのに關係するといふ事だ。

それそうかも知れんよ君のやうに燃力の強いものは強ひもので是非國防をやつてもらふし僕なんかは僕でまたこの家でストーブにつかはれるやうになつてまあ人を温かして人に仕事をさせるよいやうにするのも一つのわれ〜の務が君まあこれでもよいが僕はもつと活こよ。

そうだらふともうしてまだはたらいて文明に貢献するか國家に身を全く盡くすのかはなしたまへ。

今僕がストーブではたらいたのでは煙が煙突から出てゆくし灰と石炭屑になつて棄てられた熱だけが役に立つばかりだが僕を空気のはいらない鐵でこしらへた乾溜器の中へ入れると蒸し焼きにされるとストーブの煙の分いもつと丁寧にされてるので石炭瓦斯になつて瓦斯溜にあつまるそれまでに冷されたりきれいにされて溜つたものは瓦斯管を通つて往來の安全燈や店前の明りになり、勉強家のランプに代りいろ〜勉強が出来台所へゆくとお三がまあ瓦斯になつたらはやく煮えて樂だ今かけた御湯がこんなに沸いたと大喜びをさせるし、方々を喜ばせて仕事をさせる事が出来る。

それはそうだな人が喜んで仕事をするそでないのとは倍も三倍も結果がちがふからな實に君はかくれた大きき仕事をやつて

居るよ、まあそんなにいひ給ふなも一つあるそれは石炭瓦斯が出るときに一しよに出る物の中で直きに冷えてまた瓦斯溜に行かないさきに液體になつてしまふものでコールドタールといふ物がある、これはつい近來までは電信柱や木の塀や何か腐れないために黒く塗るときにつかはれた位のものであつたが、此頃はこれを分折して中にまた〜人間の役に立つものがあるとき大さはぎんして居たがそれはアニリン色素があるといふ事でその赤色は植物からとる茜色よりもよい奇麗だと染料につかひ青も藍より奇麗な色だともてはやされるやうになつて今までたゞ防腐につかはれて居たものがな〜價が上つたといふ事、そして此等の色を取つたあと「ピッチ」といふ黒いものが残り之が木に塗るのによろしいやうでも棄てる處はない。

そうか

それから乾溜器の中に残つたものがあるこれはコークスといつて純粹の炭素斗りだ、そして熱が強いから冶金術などの時には必要のもので、ストーブなどへも入れると火の經濟になる物を煮たり焼いたりする炭の中へも交せておくと餘程ちがひ徳用だ。

まあどうも棄てる處なし的人間の役に立つから文明の爲めに盡したといふ事が出来るかと思はれるのだ。

全くだね。が、君御互に人間がいろ〜つかひ方を考へてくれるからよいの昔第三紀の頃は御互太陽の光をかけて温かに緑色よく幹も太く丈も高く、立派に生ひ茂つて居つた植物だつたがその後久しく地の中にはいつて居た間に變つたがね、太陽は相

變らずだれ、まあ御互に人間にいろ／＼役に立つ事が出来るのももとは太陽があんなに可愛がつて大きくしてくれた御蔭だねとときりに二つの石炭が話して居たのを聞き坊ちやん竹刀もわすれて面白ひと思ひ静かにして居ましたら母さんかもう御飯ですよ坊ちは何處へ行つたかしらんと御さがしになつて居ました御聲がきこえましたので「ハイ」とよく御返辭をしてすぐ御家の内へまゐりました、そして今朝もよい事を聞いたと御話を致しました。

此話は徹頭徹尾教授することが目的であることは云ふ迄もないが之を幼稚園教育に施さんとする人は明かに遊嬉を利用して教育しやうと考へたに違ひない。是果して正當なものであらうか、勿論右の様なのは極端な例ではあるが議論の筋から見れば斯る話をして材料がむづかしいと評する外に誤りであると云ふことは云へぬ譯である。併し幼稚園は決して遊嬉の假面を被つて教授する處ではない、勿論吾人として遊嬉の教授法なるものが實地教育事業の中に或位置を有することを知つて居併し夫れは必ず小學校の最初の部分を占む可きもので決して幼稚園の範圍に來る可きものではない幼稚園は單に幼兒の遊嬉場である、消極的に云へ

ば害なく危険なく幼兒の遊ぶ所である、積極的に云へば理想的に完全に幼兒をして遊ばしむる所である、舊來の思想に従へば遊嬉と教育とは元來一致す可きものでないと云ふのであるが新思想は全然此見解に從はぬ、従はぬのみならず遊嬉を以て全然教育事項中の一事項とするのである、換言すれば幼兒をして遊戯せしむることは取りも直さず一つの教育を行つて居るのであると云ふのが保育上の新思想である、従つて最も能く遊びたる子供は最もよく教育せられた子供であると云ふのが新派の理想である。但し此思想の根本には遊嬉は幼兒の時期に於て必然に自發す可き活動の主たるもので、幼兒は之に因つて後來の活動と發達とを得るものであるから是以外何者をも添加する必要がないと云ふ預定が横はつて居ることは勿論であるが、舊思想に於ては之を許さぬのである、遊嬉は幼兒の自發活動には違ひない、そして夫れが幼兒の天性には違ひない、併し教育は全然此天性に從屬し此自發活動を満足せしむることだけで達す可きでない、教育は多少壓迫を意味して居る幾分か

無理押しすることは止むを得ないことであると舊派は辨護する、併し是が抑も幼稚園を毒した意思で吾人の極力排斥せんと欲する處のものである苟もルーソーが教育史上に名を輝しつゝある間は斯る思想は行はる可くも思へない、自然の發達に副ふとか自然の發達を擁護するとか云ふことが現今教育上の根本主義である以上は壓迫して教育し無理押しして發達せしむと云ふことは決して理想の中に来る可き筋のものではないのである 勿論幼兒の遊嬉が有害に傾き危險に瀕して居ると云ふ様な時には敢然其遊嬉を禁止し其活動を他方に向かしむることはある、そして其手段として時に強行的態度に出づることなしとは云はぬ、併しなから是に飽ちも教育上最後の下段である正常的感化誘導の方便に窮した時の權道で決して理想の方法ではない、是を以て教育は根本に於て壓迫を意味すとは如何にも受け取れぬことである、難者は又云ふ、行儀作法の如き良習慣は強迫しても之を躰くるの必要があるではないかと、併し是も又誤りである、幼兒の良習慣は其境遇次第で不知不識

十
 の間に自由で寝られる可きもので又是が正當な順路で決して強迫し壓制して押し付く可き筈のもではない、少くも感化誘導を主とする幼兒教育に於て採る可き方針ではない、最も實地に於ては時には壓迫し強制する必要がないとは云はぬ、併し其は必ず從來の方針が誤つて居つた時で即ち變則的權道と必要とする時で決して正常的なものではない、此例外なる權道を主眼としてかかるが故に教育は壓迫を意味し強制を意味すとは云ひがたからうと思ふ要するに睡眠と飲食とを除けば幼兒の自發活動は遊戯の外に一物もあるものではなく、幼兒は遊ぶことに因る外發達の徑路なきものである、故に之をして遊ばしむることは幼稚園教育の本領であるとするのが保育上に於ける新思想の根本原則で吾人が極力主張しやうとする所のものである、作し此主義の及ぶ所は其範圍が中々廣くても在る、在る保育界をして殆んど一變せしむる程に大變事を要するものである、吾人は折を得て時々本誌上に之を開陳し會員諸君の高評を得んとするものである。



育兒の經驗

東京高等 師範教諭 光藤 泰次郎

自治自頼

自分の事を自分で始末する習慣の大切なるは今更
こゝに喋々の辯を弄する必要がない。そこで此の
大切なる習慣を養ふことに頗る苦心をいたしまし
た。

第一食事 食事をいたしまするに御飯を戴くやう
になれば、皆すぐ自分で茶碗と箸とを持ちていた
だくやうに氣を着けます、此の習慣を養ふ初に當
つては甚だ手數がかゝつて面倒なものであります
ソロリソロリと戴きますのをジツと待つ辛抱をし
なければなりません、小供が不慣のためたべこぼ
して前掛やら着物やら畳まで汚す恐がある、それ

をも忍ばねばなりません。それよりは寧ろ側につ
いて居る者が世話して養つてやる方が余程手數が
かゝらず、面倒が省けて楽な位であります、しか
しそれは茶碗と箸とを持ち始めた當座だけの事
であつて、一二月の辛抱面倒を見さへすればあ
とは自分一人で自由勝手に食事する事が出来て、一
割合に長く養つてやるといふ手數が省けます。一
體子供には模倣心の非常に強いのがありますから
之を利用しさえすれば此の習慣の如きもさう難く
なくつきます、宅では長男に此の習慣をつけまし
たが、其の時分長男はとうさんやかあさんのやう
に一人で持つてたべると申しますから其の意にま
かせて遂にさういふ風になりました、長男に其の
習慣がつかますればそれから後は譯はありませぬ
皆長男を見やう見まねし容易く其の風に化して行
きます、一昨年九月に生れた次女は（此の三月
に丁度一ヶ年半になります）此の正月頃から
一人で箸を持ち始めまして、今では兄や姉と同様
にあまり世話もやかせず、一人で食事をして居り
ます。

第二兩便 尾籠な話でありますが、兩便の始末は子供の身に取り健康清潔其他種々の點に關係を持つたものであつて、忽ち諸に附するとは出来ません。極幼い頃の習慣はどうも自分の思つた通りに習慣はつきませんでしたが、それは人手の少いのと、他人任せにおくとのためでありました。こゝで私の抱いて居る考を述べてもよいのですが、實行の出来なかつたをいふの必要もありません。此の點は省きます、さて子供が一人あがきが出来るやうになれば即ち數へ年三つ頃になれば御小用は無論一人でたすとの出来るやうにとめましますし、大便の時も一所に行つて注意しては居ますが、ソロソロ一人で拭くを習はせまします、最初のうちは種々失敗するともありますが、しかし子供にやらすと却つてきたなくもあるし、面倒でもあるなど、考へて親なり、お附なりが手をかけますればいつまでも子供は人をたよつて自分でする氣にはなりません、それもいつまでも家にばかり居るならば宜しいが、幼稚園に出すべき時期はいつの間にか到來します、其の時期になつて幼稚園に出したい

が、しかし兩便の始末に困るなどというても急に其の習慣はつくものではありません、金があまりあり人手も澤山あつて「自分の家ではそんな始末はお附にやらせる」といふ方は御隨意ですが子供に早く自治自願の習慣をつけたいと思ふ方は、盗人をつかまへて繩をなふといふやうな事をせず、成るべく早くかういふ習慣をつけられたがよからうかと思ひます。

第三衣着 着物を着るといふとも子供の一つの仕事でありまして、これもしつけ方によつては案外早く自分で着る習慣をつけるが出来ましますし、又やり方によつてはいつまでも人の手を要します。さて是等の習慣をつけてしまふまでは却て面倒でもあり、手數もかゝるもので、子供がソロソロとシャツを着、ボタンをはめ、洋服を着、其のボタンをはめるなど、そばで見ると殆んど堪へ難いやうに感ぜられます、しかし最初は時がかゝり且面倒でわらうともかう仕つけた方がよいとは争はれない事實でありますから、順次皆此の方針で仕込んで参ります幼稚園に行き始める頃から殆ど

手はかゝらなくなりませす。幼稚園から歸つて来ても着物を出してやりさへすれば一人でサツサと着換へませす、たゞ帯をしめるのだけはどうも甘く参りませせん、それ故にこれ丈は手傳つてやるをりませす。

第四穿靴 下駄をはくとは容易く一人で出来ませす、靴になると、紐を結んだり、或はボタンをかけたりますので一寸面倒な所もありません、しかしこれも勿論一人でやらせつけませす。最早幼稚園に行き始める頃には可なり上手に出来るやうになりませす、靴を磨くのは大へんやりたがりませすが、どうも着物をよむし、クリムを多分に使ふ恐れがありますので、外の者が磨く時に同時にやらせる位で全く一人で放任してやらせませせん、しかし頭になつては一番大きいのは自分の靴の塵を拂ふのみならず、父の靴の塵を拂はせ、或は自身の靴を全く一人で磨かせませす、兄が靴を磨いて居りますと、妹も側に來て私も磨くといふては塵を拂つたり、クリムをつけてこすつたり、忽ち習慣がついて仕舞ひませす。

第五入浴 入浴に致しましても湯屋に参りましては傍について居て十分の注意を以て一人で出入するを習はせませす、最初は一寸こはがるやうのもありませすが、すこし手助けしてやつて出たり又入たりするをが出来ませすと自身の力でそれ丈の事が出来得るといふ自覚が出来随つて満足が出来ませす、數へ年四つになる頃から此のやうに始ませす、凡そ其の年の内にはすつかり一人で出入るやうになりませす、浴場に参りまして一人で出入りさせませすと、傍に居る人は大へん險忝に思はれるのかして深切の心から出したり入れたりして下さるをも度をでありませす、見ず知らずの他人がからまでつくして下さる親切の心は實は感謝の至りに堪へませせんが、しかし當人は今出たり入つたりするとの稽古をして居るので實は其の稽古も度々妨げられるをがありませす。定めて子供にかやうな事をさせるとは冒險なをのやうに思はれ又甚だ親が無情のやうにも思はれるでありませうが、決して親は無情ではない積りであります、親の手で入れるなり出すなりは容易く出来るのであるけれども

子供に自分から出入りする習慣をつけやうと苦心をして居るのです。しかしかやうな深い心があらうとは誰も思ひ知る筈がありません。かくの如くにして子供の爲には毎度他の人へ頭を下げ、腰を低くするに及びます、湯に入つてからも顔なり手なり頭なり足なり腹なり自分で洗ひ易い所はどん／＼洗ふといふ習慣をつけやうと始終つとめて居ります、此の頃では八つになる兄や六つになる姉は自分の手足を洗ひ顔や頭を洗ふ外に湯をくむといふ役目をいひつけてあります、弟や妹が多数ある爲にちつとも不平をいはず、喜んで湯をくみ、水を汲むの勞役に服します。

第六歩行 あるくことが出来るやうになれば成るべく自身の力で歩行くやうに氣をつけて居ります、他所へ出かけます、時に子供にあるかせるよりも抱くなり、負はせるなりした方が餘程早くて面倒はないですが、しかしそれでは何時までも足が達者になりません、足を達者にしやうと思へばどうしても澤山歩行く稽古をさせねばなりません、それ故に成る丈氣を煉らして子供を歩ませます。若

し足が既につかれてきて抱かれたり負はれたりしたがるやうになりませすれば抱きつきりに抱くといふをせせず、抱くと歩かせるのを交互にさせます自分の傍の電信柱から電信柱までの間を抱いてやりまして、サア柱の處へ来たから御あるきなさいといひてあるかせ、其の次の柱から又抱いてやる若し疲れ方がひどくなつたら三つ目なり四つ目なりの柱まで抱いてやり、歩かせる方を少くする時には柱の代りに曲り角に來たならば抱く歩かすの交替をさせても宜しい。此の方法は子供をして思はず知らず澤山の道のあるかすとの利益があると同時に自分等と殆ど何の交渉もない電信柱とか曲り角とかいふものゝ觀念を確にするとの副次的の利益もある、かやうにして足ならしむて行けば幼稚園に入る頃には可成り足は達者になつて餘程の遠距離にあらざるよりは車の力、人の力を借りる必要はあるまいと思はれます、私の處の子供は皆づかやうな風に取扱つて來ました。

第七自分の品物の始末 子供の所有の物を大切に保存し且自分で始末させる習慣をつくらうと務め

ましたか、どうも品物を大切にするといふ習慣は思ふやうにつきませんでした、たとへば玩弄物を買つて與へましても繪葉書を買つて與へましても子供の力にて容易く破り得らるゝものはどうも大事にとつてかくといふとはありません。實によく破壊いたします、たとへば電車のやうなもの、瀛船のやうなもの、大鼓のやうなもの、人形のやうなもの、つぎつぎにいくら買つて與へたか一寸數へ難い程であります、しかし是等のもので今残つて居るものは一つもありません。子供といふものは破壊性に富んで居るのであるから、それでかやうに破壊するのであらう、破壊する間に幾分なり智識を得ればよいとあきらめて居ます、纏つて考へて見ますと、日本の玩弄物は價は安いとは安いが、安からうわるからうの謔にもれず、實に破れ易い、活動力に富み破壊性に富む子供のたからこれは破れるのが當然で、若しも此の玩弄物を破るとの出来ぬやうな子供ならそれこそ病身の極ひよわい子供であらう、それよりか玩弄物は幾つこはさうが身體が丈夫で、活潑で元氣よくてい

きいさして居る方が余程ましであるといふ心慰めて居ります、今子供の破るもの出来ない玩弄物は金胴の獨樂、シットロポール、其の他幾らもありませぬ、ゴムマリの如きは忽ち針の槍につき透され、或は缺の刑具ではさみ斬られますし、紙風船ゴム風船の如きは忽ち唾にて破られ手にて破られて見るもあはれな最後を遂げます、さて子供は見さかひがありませんから折々は私の雜誌の表紙を引き破り、挿繪をとり、中へは墨や鉛筆にてくろくく塗るをもあります、しかしこれも年と共によくなりまして一番の兄と次の妹の如きは最早せんなどは少ともありません。自分のものたとへば其の他自分の着て居た物を始末し、朝起き出た時寢衣を始末し、自分のはいた足袋や靴下とは皆定めた場所に入れかくやうにさせました。

又兄は弟のものを始末してやり、姉は妹のものを片附けてやるといふ風にしておきます、かくするには子供のために十分設備をしてやりますと、あまり力を費すとなし此の長習は養はれるだらうと思ひますが、設備が甚だ不十分な爲に力を盡した割には十分に養ひませぬ併し長男や長女はやゝ物が分つて養ひましたから、よくこちらの云ふことも分りますし追々好成績をあげ得るだらうかと楽しんで待つて居ります

如何にして美しく圓滿なる家庭は作らる可きか

白山生

標題の様な質問が二三週間前に記者の机上に表はれた直ちに返書を出さうと思ふて筆を執つては見たが、いや／＼斯様な質問は決して此質問者ばかりのものではない、恐らくは方今妙齡な婦人方の胸中には誰れにも必ず存するに違ひない、して見れば是は此本人へのみ返事するよりは一層の事誌上で一般に述べた方がよからうと思ひ直して斯くは餘白を拜借するに致しました次第です、應答が手間取れて御待ち遠でしたらうが斯様な次第ですから悪しからず御了承を願ひます。

扱て本文に取り掛ります、一体美しいとか美しくないとか云ふことは感情上の問題で誠に漠としたものであります、此漠とした感情を標的にして此標的に適ふ様な家庭を作らうと云ふのですから問題は頗る困難なもので殆んど議論什悪いもので

ありませぬ、何故と云ふに發問者の美しいと云ふ觀念と記者の美しいと認むる所のものとは果して同じであるか何うかい第一怪しいものです、従つて記者の意見が果して質問者の望む所のものを表現するや否や六敷いものです。

又問題中に圓滿なる家庭と云ふ注文であるが是が又頗る曖昧な言葉であつて其中に何々の箇條を含むか殆んど正確に定めがたいものであります、人は圓滿と云ふ言葉を能くつかひますが、併し此意味を善くとれば誠に結構なことで何一つ申分のないことゝなるし、悪くとれば御多分に漏れない、至極凡様なことゝなるのであります、あの人は圓滿な人であるとの評は能く個人の評にあることではあるが、之を善くとつて考へれば申分のない君子と見えるし、悪くとれば八方美人で捕へ所のない極めて要領を得ぬ人と云ふことにも取れる、斯様な譯で圓滿と云ふ言葉も美しいと云ふ言葉も其意味が頗る曖昧で之に向つての答辨は甚だ困難を感ずる次第であります、併しこんなことを云つて居つても果てしがたいから此處には家族間に平和

な交際が維持され其生活上には夫れ々々不足を云はないで濟むと云ふ極めて平凡な家庭生活に就いて説明して見ませう、是が或る意味に於ては最も美はしく最も圓滿な家庭であります、切て斯様に平和で満足な家庭と云ふものが成り立つには次の様な條件が是非とも必要となる譯です。

第一 家族は相互に意志の充分疎通せんことを要す、お互に心の知れ合つて居ることは平和を維持するに極めて必要のものです。

第二 家族は相互に最良の家族たらんことを心掛けよ、主人は最良の主人たらんことを心掛け、主婦は最良の主婦たらんことを心掛け、老人は最良の老人たらんことを心掛けて行つたらば家に平和の來たらざらんとするも得可からずと云ふ譯だらうと思ひます。

第三 經濟に於て成功せよ、家の暮し向きが不如意の中は何んなに心掛けても圓滿な家庭は望めるものではありませぬ。衣食足つて禮節を知る、とは實に能く云つたものです、世の中は口先きばかりではたとひ親子の間でも濟むものではありませ

ん何事にわれ、お月にお祝を仕合ふとか悔みを云ひ合ふとか云ふ様なことでも之を實行に表はすに直に金を要します、金なくしては義理も行へたものではありませぬ。故に平和で満足な家庭を作らうとするにはどうしても經濟に於て成功しなければなりません、經濟に於て成功すると云ふのは大金持になれと云ふのではありません、勿論金と云ふことは直に其分量をも意味しては居ますが、私の云ふ經濟と云ふのは収入と支出との調和と云ふことです、即ち相當の収入があるなら夫れに應じた支出をして行きさへすれば家計は何等の心配もなく極めて安樂に生活することが出來、従つて家族の各自は満足して行くことが出來ますが、若し之に反して支出が収入を超すとかが若しくは從來の家庭を維持する丈の収入がないとか云ふときには逆も安心な家庭は作れるものではありませぬ、斯る場合には速かに改造して家庭を収入の範圍内で生活し得る様にしなければなりません。

第四 主婦の鍊腕を要す、以上の三箇條之を能く實行すれば家庭の平和と満足とは容易に得らるゝ

こと受合で、即ち質問者の所謂美しく圓滿なる家庭も現出せらるゝ譯ではあるが、併し此處に一つの困難があると云ふのは以上の三箇條は何れも家族が夫れ々々各自に自ら進んで實行しなければならぬもので若し家族の中に人は何うでもよし自分さへ能くばと云ふ様なものがあつては到底行へた話ではないのです、所で家族の各自が斯様な考を持つと云ふ様な家は何處にありませうか、まゝ千軒に一軒あるかなしでせう、して見ると美しき家庭や圓滿な家庭は逆も實現出来ないことになりはしますまいか、此困難を救つて家族をして皆右の三ヶ條を自然と實行する様に心掛けさせる迄に導く所の人は誰かと云ふと主婦其人でありませ、是に於て主婦の責任は實に重いものと云はねばなりません、主婦が其家の家風や家族の心持を導いて斯様に迄することが出来ないとするれば其家の美しくなるか圓滿にならないかは自然の成り行き次第で善くなることもある代り悪くなることもあつて主婦の力は別段大した功能もないものとなりませ、家庭を自然の成り行きに任すと云ふ以上は寒

い荒びた風が吹がうが、暖き春風が吹かうが一向頓着しないこと云ふことになつて極めて殺風景なものになりませうから誰れも之を望む人はありません、既に家庭を何うにか理想通りにしたいとすれば夫は一に主婦の手腕内にあること以上述べたる通りであります、つまり美しき家庭とか圓滿な家庭とか云ふものは自然の成り行きで出来るものか然らなくば非常にえらい主婦の力に依つて出来るもかでありませ、質問者は果して何れを採る御考にや質問の出た所で見ると無論自ら進んで美しき家庭圓滿なる家庭を作つて見たいと云ふ御考の様に見えるが、若し果して然りとせば宜しく貴嬢は大奮發してえらい婦人となることを第一に心掛けて全家族の心を悉く己れの配下に屈伏せしむる覺悟がなければならぬ。今左に參考の爲に其えらい主婦たるに必要な條件を説明して見やう、夫れは外でもない何れの方面も役に立つこと少くも通常人の二倍なりと云ふことである、少くも人の二倍は働く程でなければ決して家族を配下に引き廻はすことは出来ない、口先き丈で下女や家族を引

き廻さうと云つたつてそんなことで引き廻されて居る人間は今日の中にはあるものでない。兎角今日の女學校出のお奥さんは口が達者で立ち働に掛けては零で、こんなことで人が云ふことを聞くものか、女の仕事である所の料理裁縫は勿論のこと育児經濟交際上の事迄も悉く自ら遣つてのけて然も紳々として餘裕ありと云ふ風でなければ逆も家族の心を收攬し之を感化し誘導すること出来ぬ、若し自分には是丈の力がない、と思ふならば今日より直に勉強して其力を養ふことに勉めなければならぬ、若し又勉強しても斯様にえらいものには到底なれぬと云ふ弱點があるならば退いて己れの身を慎み全力を盡して唯々家族の爲め夫の爲め身を粉にして働いて少しでも家族の幸福を進めることが出来たらば獨り心に悦びて神なり佛なりに向つて己が誠意の幾分徴ありしことを感謝しなればならぬ、勿論自分の功に誇り高ぶる様な振舞は毛頭あつてはならぬ、そして益々精を出して家族の爲め夫の爲めに立ち働くのを唯一の楽しみとし満足としなければならぬ、斯様にして誠

心誠意己を盡して忠實に働いたならば何時かは幸福な時に遇ふかも知れない、併し世の中は決して單純ではない、偶然の不幸や災難は何處にもあるから假令斯様に己を盡して働いて居ても一生不和と満足との間に終る人がないとも限らぬ、万一斯様の場合に遭遇ふことがあつたら其は千載の一遇で是非がないとわきらめて己れは依然然變らず忠實に盡くすより外に途はないものである是が主婦として又家族として取る唯一の途であらうと思ふ。

此外家族同志が相互に意志を疎通する爲には如何なる方法を探る可きか又家族は夫れ、如何なる心得を持つ可きか、老人は如何に行ふ可きか主人は如何に振舞ふ可きか論じ來れば數限りもなく色々な注意や心得が出来るでせう、其他家庭の設備や衣服飲食の事も實地に論じたら限りがないでせうが何れも主婦の腕前に依頼す可きものですから茲には一々述べますまい。

要するに質問者の要求する美しく圓滿なる家庭と云ふものは或度迄は主婦の働き次第腕前次第で出

来るものですが、夫れ以上は逆も人力では出来な
 いのです、人力で出来ない處は神や佛に任す
 して人力の及ぶ丈は力をつくし精を出して己れの
 出来る限り忠實に立働くことが一般に主婦たるも
 の、心掛く可きことであります、以上は予が家庭
 に関する意見の一端であります、果して質問者の
 意を得たか何うかわかりませんが思ひ付いたまゝ
 を書き付けました、尙御不審な所があらば重ねて
 御質問下さい。

女子の四十五歳

下等動物の或種のものでは、一と度び生殖の機能を管んで數多の
 子女を産んで仕舞へば、生涯の能事既に全く終りを告げて、直ち
 に死滅するものもあるが、人類に在ては子女を生むと云ふのみで
 は、未だ婦人の任務の全部が盡くされてゐない。従つて人類生涯
 の過半は所謂「子持ち期」と云べきでない、少くとも女子の二十
 歳から四十五歳迄が「子持ち期」で、夫れより以前は修養期、夫
 れより以後は他の仕事の完成期であります。

實を云へば婦人の四十五歳は寧ろ身の自由を得たる時、換言すれ
 ば最早や子女を生み止めた時で、これからホットトと息して、更に
 奮進し、若年頃からの或宿望を成就させ、中年頃からの或経験や
 理想を實現せしむべきであります。身に之を實行し自ら之を實現

させる事が出来なければ、セメテは其子女達に己が精神を吹きこ
 んで、心身共に健全なる新國民を造り出すべきであります。

向上活動の壯快談は青春の焰のもゆる血氣の壯夫には適しよう、
 サレド既に老ひ果し身、若くは老衰に傾ける我等には餘りに遲き
 に失せりと云ひ給ふか。否とよ老の身に取つても決して遅い事は
 無いカトーは八十歳にして、ギリシヤ語を學んだ、ソホクレスは八
 十路を越えて雄篇「オーシプス」を書いた、シモニテスが儂鯉の
 賞讃の辭を負つて逝つたのは八十歳以上である、テオフラタスが
 「人の品性」を書き始めたのは九十歳、チャイサーが有名な「カン
 タバリー」物語りを書いたのは六十歳、ゲーテは終焉まで奮勵し
 て遂に「ファウスト」を完成した。元より斯の如き人々は異數で
 はあるが、然かも彼等は彼等の生命の流れが其極地に入らん迄で
 には、尙ほ甚だ遑遑であるのか示すものである。

寧ろ、手を懐ろにして死を待つのは、生きながら死の生活をして
 居るのである。死ぬ迄働くと云ふのは決して厭ふべきでない。
 幾多の社會の新事業は、實際経験を重れた圓滿完全なる諸姉に向
 て其手を待つことが切りである。四十餘年の早霜を積んで産み出
 した諸姉の豊富なる経験と、圓熟なる知慮才能とは極めて貴重
 なる寶である。之れを以て花嫁の呵責に濫用するのは餘りに惜しむ
 べき事である。ドーカ之れを以て國家社會のために廣く資益した
 い。女子の四十五歳は正に皇天が機會を與へて、婦人の奮起を促
 すの時ではあるまいか。滿天下の婦人諸君、願くば一家内に踞踞
 して平地に波瀾を起す様な愚人の眞似せず、大天下の婦人として
 理想の建造に資益せられよ。(衛生雜誌)

○女子教育に就て

鹽野生

我が國へ西洋の學問が輸入してより、女子の教育も誠に必要なるものであるといふことが分り、俄に女子教育の説行はれ、今日では全國中男女とも同じ様に學校に這入るやうになりたれども、何分此の女子の教育といふ事は、昔は無かつた事で、有つたにしたところ、女大學、女今川を讀む位であつたが、急に女子も男子の如く高尚な教育をするやうになつた故、忽ち惡風俗を起すの傾向になつた、しかし世の教育家が段々矢笠しく言つて、近年は漸々宜しくなつた様なれども、未だ思慮すべく矯正すべき點は數へ切れぬ程である、教育家たる者は能く心を潜めて、改良して行かねばならぬ事である、一体女子を教育するの必要は何れにあるかと言へば、茲に言はずとも知れたことであるが、所謂良妻賢母となつて、能く一家を整理しよく舅姑に仕へ、能く夫を助け能く子女を養育して天下國家の用に立てしむるために外ならぬので

ある、然るに往々にして子女の教育を受けしがたかに却て親を侮り、舅姑には善く仕へず、口には高尚にして日用不用の道理を説き、今日毎日必要欠くべからざる家事上の事を知らず、氣位のみ徒らに高きに馳せて日常の家事を執るを屑しとせざる心得違ひの者多きは事實争ふべからざる事である、誠に心の卑くして簡違ひの事と言はねばならぬ、斯くの如さに至りては如何に學問をするも何の役にも立たざるのみならず、折角時日と金錢を費して其の子女を惡しき者にする者と言はねばならぬ、此の嘆すべき惡結果を生せる原因は種々なる方面より依て起るものなれども、一は以て女子の教育に従事する教員其人の罪にもある、何となれば彼の女教員中には往々未だ年少にして、先々々々と言はれて月給でも取つて居るのを以て意氣揚々として得色ある者多きを見る、人は高尚なる心を以て教育するも、尙善き事には感化し難きものなるに、斯る卑劣なる心を以て教育したらんには如何にして善良なる生徒を養成することを得るか、心淺き人は兎角家事などを務むることを肩

しとせず、唯書物でも讀み机にでも倚て居れば氣高い様に思ふ、是れ固より卑劣千万なる根性より來ることである、精神だに高尚になれば如何に貧乏をして居るも、如何に賤業を執りて居るも心に耻づる事がない、故に女子教育に従事するものは先づ自ら高尚なる精神を以て従事せねばならぬ、已れが心卑劣にして如何に立派なる事を言つても、如何に立派なる様子をしても、迎も人を感化することの出來るものでない。

又教員のみならず親たるものも小兒を善き者にしやうと思ふには家庭の教育に注意せねばならぬが兎角兩親も眞正に身を修めて居る者でなければ如何に小兒に訓戒しても聞くものでない、夫故に兩親が先づ正しくせねばならぬ、夫れが出來ぬ者であるから小兒までいけなくするといふは遺憾な事である、思ふに教員は自分の職掌柄であるから教育の理論方法等は幾分か自ら研究する事であるか、家庭の兩親に至つては家業の爲めにさういふ研究の暇もなく、實際行ひ難き事である故兩親の心得より小兒を育てるに就ての事など、古人今人

の金言理諺とかいふ様な事より家庭教育に極く要るな事のみを簡単な語にして綴り、仮名でも附けて極く分り易き様にして、子弟を有する父兄の手に元備へさせる様にして、一日に二三行位にてもよく讀みよく守らせて行く様にすれば大に簡易にして効果のある事であらうと思ふ、然らざれば忙しき父母兄弟或は愚父愚母に至つてはとういふ風に小兒を育つればいかといふ事も分らず、唯食事と興へて小兒の手足さへ伸ばせば紐たる義務の濟む様に思ふ、それで家庭で無茶苦茶な事をして居るから學校に行つてもどうも甘くないかぬのである、故に予は小兒を有する兩親に讀ます最も簡易にして有益なる著述あるを望むのである、世の女子教育に任ずる者は先づ自ら心を高尚にするばかりでなく兩親に讀ます極めて平易の書物を著述せられんことを希望するのである、實に女子教育は國家の上に取りて重大なる影響を及ぼすものであるから教育家たるもの最も力を盡さねばならぬ所である。

讀書の選擇

虛空子

近頃出版界が非常に賑かになりました、従つて日々刊行せらるゝ書籍の数は殆んど數へきれないほど澤山であつて、所謂汗牛充棟も當ならずといふ有様であります、勿論その内には種々の種類があつて、或は専門の學科に關するもの、或は科學の類、或は辭書類、或は教科書など到底詳細なる區別をすることは出来ぬが、特に少年少女諸子の讀物として世に出されたものだけでも甚だ多數であつて、その良否を選擇するといふことは、かゝる際にとりわけ必要なことであります、勿論いづれの部類に屬する書籍でもそれを購入するにはよく／＼その内容實質を知つて、果して有益であるか否かを考へることは肝要に相違ないが、就中少年少女の讀物に關してはその選擇に一層重きを置かねばなりません、そして最早丁年以上に達した人に取つては自分みづからその良否の判断が出来ますからさまで心配はないが、未だ小學校の門を

出ぬものや中學校に在學して居る位の年令の人はまだ十分に思想が發達して居らず、従つて判断も頗る幼稚ですから、此等年輩の人の讀物の選擇は實にその父兄又は監督者たるもの、當然たる責任でありませぬ、現今多數の書籍が出版されるのは單に供給者たる出版業界が發達したといふに止まらずして、又それだけ需用者たる讀書者界が進歩して來たのであります、そこで進歩發達といふことは決して悪が善となり害が益となり、醜が美となるといふ意味でなく、すべての生活の程度が高まつて來たのに過ぎないのであります、詳しく言へば、あらゆる事物が複雑になつて自然職業が分業的となり、そして活動は組織的になつて來たのが世の所謂文明で進歩すれば進歩するに従ひ、發達すれば發達するに従つて善悪美醜利害得失皆その度を高めて來るのです、そしてこれが人生の價值あり趣味ある所以なのであります。

これに依つて書籍が多數出れば出るほどその中には善いものもある代りに又悪いものも少なくなはなりません、従つてこれが選擇を層一層注意を加へな

ければならぬのみならず、殊に少女少女の讀書の選擇如何即ちその良否如何によつては將來の發達傾向の上に及ぼすところの影響が極めて偉大なものであつて、これがために往々世の父兄諸氏が大切の子弟の成長に誤らしめ、延いて全般の教育上にも非常なる困難弊害を與へるやうに到ることがあるのであります。

要するに讀書の選擇は少女少女時代に最も肝要であつて、これが保護者たり、養成者たり、監督者たる父兄教師等は深く注意してその責に當り、以て彼等子弟の發育を完うせしむるやうにせなければなりません、而して少女少女の讀書は概して利害得失といふことよりも彼等の趣向によりて誘はれ導かるゝもので、その趣向といふことは又最初に興味から習慣的に養成せらるゝものでありますから幼少な時代より兒童に適當な讀物を選び與へ、且つ周囲の感化によつてその趣向を正しき方向へ漸次進めて行くといふ風にとめなければならぬ、これは單に父兄といふよりも家庭全体に關係して居ることですから誰しも常にその心得を持

たねばならぬこと、信じます。

此頃の料理

石井泰次郎

深 皿 烏賊、竹の子、山椒の芽あへ
 烏賊は足を取り去り、甲を出し二つに切りて開き皮をむき去りてよく洗ひ、巾二三分、長一寸位のたんざくに切り、ざつと鹽湯にて湯煮す、(湯鍋の中にに入れて二分間位)

竹の子は小さきものを皮をむき、よく湯煮して小口より一分厚さに切り、かつを煎汁、醬油、砂糖等にて下煮をなし置く。

普通の味噌を摺ばちに入れてよくすり、うらこしになして鍋に入れ、味噌五十匁に對して砂糖二十匁、みりん酒三合、水三勺位の割合に加へ、火にかけ木杓子にてよく煉り、

次に木の芽を摘みてよくあらひ、これもすりばちにてよく摺り、前の味噌の大方煉れて固くなりし所へ入れ、共によくまぜ鍋をゑろし、右のいか、

竹の子等を入れてませ合し、和へて器に盛なり。

○酢の物 鱈の角切、若紫蘇

きすの鱈をふき、腸を出し、頭を去り、三枚におろして角形に切り、しほをふりかけて暫く(十五分間位)置き鹽のしみた頃さつと水をかけて洗ひ、皿に盛り、上に若しそを置き、甘酢をかけて出すなり。

あま酢のこしらへ方は味淋酒一合を七勺に煮切りたるものへ砂糖十匁、酢五勺を加へて煮かへしたるものなり。

○椀 較らん切、割ふき、里芋つぶし、木のめ、たひらきは貝より肉を出し、洗ひて程よき大きさに切り、ざつと湯煮す。

露は湯煮して皮をむき、二つ三つに割き、一寸二分位づつに揃へて切り置く。

里いもは少さをえらみ、大きなるは少さく切りて丸くむき、湯鍋の中に入れて湯煮し、次に湯を切り一つづつ布巾に包みて押しひらきて置く。

以上の品々用意なして次に椀の汁をつくる、先づ水四合をはかりて鍋に入れ火にかけ、煮え立ちか

かりし所へ薄くけつりたる鯉魚ぶしを六匁ほど入れ(かつをの粉になりたるは入るべからず、汁に

ざりて悪し粉は煮物をなす時の煎けにかふべし、直に上に浮ぶ泡をすくひ去り、一分間にて鍋をお

ろし、蓋をして一分間置きて鉢などの中へ絹ふるひにて漉し込むなり是を一番煮汁といふ、其一番

だしを取りたるあとのかつをを再び鍋に入れ、水を加へて五分間煮出したるを二番だしといふ、一番煎汁は椀盛、茶碗、吸物などの汁をつくるに用ひ

二番だしは煮物、みそ汁をたつるなどに用る也。さて一番だしを鍋に入れ火にかけ、煮立ちし所へ

醤油一匁二匁、みりん酒一匁二匁、鹽一匁入れて味を試み、あとより醤油を六匁を足し入るなり。

味を試みて醤油の質によりてからき時は入れずとも又少なくするとも、あまき時は多く、其時のかげんにて入るべし。

次に葛粉を水にてとき、右の汁の中へひき入れ、少しどろりとなるかげんになし。

たひらき、ふき、里芋等を椀に入れ置き、汁をつぎ入れ、木のめを一房入れ蓋をして出すべし。



紀念の牛塚

川口孫次郎

全体牛も馬も重荷を負つて他に戦鬪力の出さうにない場合に、馭者が其前に立つて率ゐて進むのは波等を率ゐて其遲滞を少くせんとするからのことであるが、一朝全く荷を負はず曳かざる場合とならば、馬を後にして先づ進むは馭者の常で餘程ハイカツたものでなくては後から馬について行かぬに反し、牛を後にして先きを進む馭者は何處を捜がしても決してない、殊に日本産の牛に於て然りである。「牛には心許されぬ」といふ幾多の苦がい経験があるからである。一々挙げ來つた例によればドウしても牛はあまり人望のない方の氣の毒なものである。

何は扱ふき、牛は人相が……オット……牛相が

よくない。心して觀たまへ、動物の中で第一等の凄い顔付をして居るものは此地球上では先づ此牛君であらう。顔付を見て感情上から愛憎をすることは匹夫匹婦の心事であつて國士淑女のいたく蔑むところではあるが、正直なところをいへば顔付がねちけてくすんで隠険に見ゆるとドウしても光明な快活な相貌をして居るものほどに他人に快感を起さぬことは確かな事實であり、又隠れたるより顯はるゝはなく微より明かなるはなしとやら内にネチけて歪んで居つては如何に外形をつくらんとしても矢張どこにか相貌の上に現はるゝものであるから、牛君なども今少しあつさりするやうに修養するがよからんかと思ふ。

併し、天地萬物を造つた神が、否天地萬物が自づと出來た其自然が餘程匙加減を善くして萬物に依估の憾みのないようにして居る。上述の例丈では一方ならず不利な不名譽な牛君なども浮世での沙汰は兎もあれ角もあれ、大丈夫の事、棺を蓋ふて後定まるとやら、彼の献身した後の効用といつたら恐らく家畜中の随一であらう。其肉皮骨脂角

毛、極言すれば爪から先きも不用なものがない。知らないもので始めて知つた者は驚かざるを得ない位である、但し此方面の詳しいことは博物の専門家が喋々するところだから吾輩は之に立入ることを屑しとせないのである。唯茲に明に斷言出来ることは牛に如何なる缺點ありとも右の一條で一切を償ひ返して尙ほ遙に餘剰がある丈の効用を生になして居ることである。

況して牛君は決して右に述べて来たばかりの冷血な不作法一偏のものでない。牛君の意氣惡げな人の虐待に由來すること馬君のそれ以上であるからである論より證據、古來書題に牧童吹笛とあつて、無心の吹笛の童を載せ長閑に牧場より歸るものは彼牛君ではないか。更に我輩自身の實驗に據つても牛君の色彩に關する趣味心を窺ふことが出來た。今から五六年前地方の某中學校の増築工事中、石材運搬の荷車を挽いて来た大きな牡牛の頭が其牛逐の休憩中に、ドウしたものか荷車との聯絡を外づして此方の中學生等が夢中になつて庭球の競技をやつて居るクラウンドの方向にノッ

リノと所謂牛歩を轉じて來始めた。何れに來るか此方注目して居ると、白組の方には向かないで、紅の帽子を被つた選手等の一群の居並べる方向を指し大きな首を長閑にゆりながら徐ろに紅の選手たるべく出馬否出牛といふことに愈きまつた。今迄競技に夢中であつた紅の選手等も此思ひ懸けない唐突の來援に、頗る狼狽して大騒ぎをやつてヤレ牛が攻撃して來たなどと叫んだものさへあつたことがあつた。併して當時事情を局外から靜觀して居つた吾輩には牛が無かし失望したらうと思ふた。何も惡戯をやり來たのではない唯彼の美しいと思つたものにおこがれて來たばかりであつたのである。實際、牛は色彩については亞弗利加内地の野蠻人よりは勝つた辨識力を具へて居る、少くとも彼等は赤色を大賛成である、赤でなくては紫色が第二の賛成色である。無神經のやうに人から蔑まれて居る彼等でも此等赤なり紅なり紫なりの装を身につけてもらへば彼等のうれしげな容子が假令顔面の筋肉の動きに現れざるにせよ、其行動の全体にあり／＼と見ゆるのである

随分しはらしいところがあるのである。

南海鐵道の終點から、南東十五里、龍神街道に沿うた山間に牛の爲に建てられた一基の石碑がある。

由來を聞けばその昔世界隈の猫の類はどの山田を耕さん爲に村の或一家に當歳の仔牛を運れた

親牛を飼つて居つた。親心といふものは又一種特別のものと思えて彼の無愛想な顔付をしながらも

憤を愛することは非常なものであつた、併し之は勿論所謂破憤の愛であらうと誰しも思つて居た

が、氣の毒にも或日それが左様な苟且ならぬ眞個

の愛であるといふことが證據立てられた。

事の起りは如月のさし入りの或朝まだき、牛飼の下部は已れの室から稍々離れた例の牛舎に秣をや

りに行つた。門が一本外づれて舎内はいたく取亂

して居る。片隅に憤が小さくなつて縮まつて居る。

之は大變と早速其由主人に傳へて諸共に調べてみ

ると、舍外に親牛の蹂躪した蹄の痕の間にところ

く、異様の足跡がある。血戰の紀念が點々として

敷へらるゝ。主人は事態容易ならずと見てとつて

兎も角も裝藥したる獵銃三挺を取出し心利さだ

る若者二名を伴ひ即刻親牛の行衛探索に取かつた。どうも非常の混戦をやつたものと見えて其跡

を傳つて行けば野を経て山に入り林を抜けて復た

元の處に返る。之ではならぬと更に逆に詮索して

つたつてみると途中の或谷川を飛び越した跡があ

る、茲に至れば追つたのではない最早追はれたに

相違ない。血闘の益激しくなつた紀念のしるしが

彌々歴然として來た。主人始め二人の若者共もい

たく牛の爲に憐れを催し一刻も早く尋ねて其結果更に十數丁許彼方の絶壁の下にやつと見出

した。ホツト少しく安堵したのは牛が頭を下げて

起つて居つたのを認めた一瞬であつた。馳け寄つ

て見ると、彼は全く戰鬥体形で畢生の努力を單め

て四肢を踏張つて居る。全身完膚なく惡戰苦闘の

歴々たる紀念をといめ、鼓動は激浪の如くに其腹

部に波だつて居る。全く奮闘眞最中の體勢である

更に三人に頭から冷水をかぶせたのは其親牛の角

にかゝつて絶壁の面に壓付けられて居る當の敵であつた。敵とは果して何物ぞ、猪か、あらず、熊か、あらず、又鹿にも非ず、なく日本内地に於け

る山の主なる狼であつた。三人は爲に覺えず戦慄したが、流石に主人は早速我に歸り、身構へして銃口を擬して近寄つたが、敵は壓迫せられて早や絶息して居る様子、されど牛は之を知る由もなく唯もう夢中で押し付けて居た。憐むべきは彼牛の胸中にも此際唯人間の來援を待つ外に一切已に勝利なきことを自からも能く覺知して居つた事である。それと氣がついて主人は若者共に念の爲に狼に留めを刺さして扱自身は牛に一層近寄つて、『オー能く戦つた、ふれが來たぞ、安心せよ、憤も無事だぞ、』と吾知らず心の底から慰めの一聲を洩した。之が麗はしい人情の流露、牛にも定めて徹したに相違ない。但し主人としてはまだ十分でなかつた。兎に角主人の意が彼に通じたと同時に今の今まで激しかつた鼓動がビツタリ止つて、力一ばいに踏張つて居つた體勢がグラリと崩れてバツタリと僵れて、早や瞑目して居る。呼べと勵ませど何の反應もなく見る／＼うちに冷却して行くのであつた、一人の若者は機轉を利かして馳け返つて宅に急報しやうとせる途中、今朝來全部落僅十

戸の者共盡く業を廢して彼家の爲に彼方此方と搜索の途に出懸けて來た其一部と出遇つたので、報が忽ち村中に傳はつて斯かる山里の美風ともいふべき一村一家の如く我も／＼と心付きのまゝに薬を携えて走せ寄つたが、併し彼牛には最早薬はいふまでもなく溪川から掬んで來た清冽な水も通らない。唯微温は辛うじて残つて居るばかりであつた。そこを年の頃八十にもあまれる鶴髪の一老異人が通つた。全く見知らぬ人だが村人の愁傷の態を見て徐ろに歩を此方に轉じて、いざ診て遣さんといふに、願ふてもなき幸と有りし次第を手短かに語り告ぐるを聽きながら瞬きもせず彼牛をまもりつゝ、頓かて徐かに、されど明晰に、並み居る主人若者及村の純朴の人々の心の底に徹する力ある調子にて、『心臓の破裂なり、今は全く救済の途なし、一瞬の呼吸に惜しきこととしてけり』と斷言し、いざ然らばと立去らむとするを、憾むにはわらねど辛き世の濁にまだ虐げられぬ純粹素朴の主も村人も、亡くなりし牛の名残り惜しさに、男泣きに覺えず眼を拭つたその有様をチラ

と認めて、流石に寒巖の如く枯木の如き鶴仙も、物静にふりかいたりみて人々を慰め顔に、『傷む勿れ、心の破裂はうれしさの感激に基きしものぞ。我日の本にて生きとし生する禽獸の何れか彼狼に敵するを得べき。さるに其牛の克ち得たりしは、いとしかかりし我子故に迷ふ親心の恐ろしくも我身を投げ棄て、防ぎ戦ひしに運よくも萬が一の勝を制したるものなれ。そこ許等の早速の救護は如何ばかりか身に泌みてうれしかりしならむ。一時に胸の塞さがりて血管の破裂せしも全くその故ぞ。逝きにしものを惜むは世の人心ならむ。しかはあれども迷の多き世に子故に迷ふてふ世にも尊ふとさ悟りを得たりし其牛に何の憾か遺りあるべき。げに其牛こそ此郷の誇りなれ。よしなに後事を營みやり給へかし。之も抑其處許等の善根といふものぞと。』語り終りて、彼老異人は白馬嵐の肌を透す寒さにも悠然として彼方をさして苦の細道たりつゝ影は早や蒼藓として晝尙は闇さ杉の木立にかくれ終はんぬ。

斯くてあるべきにあらねば、異人の教のまゝに一

家一村の心の底より穢がれし暖かき同情の下に彼の慈愛深く勇氣に富みし親牛は静けく平らけく、茲に掲げし紀念の牛塚の碑の下に永眠することになつたのであるとの言ひ傳である。そして、道祖神の松が假令薪に切られ四辻の石佛がよし石橋にせらるゝ世が來ても、此牛塚ばかりはドンな公力を以て迫まられても動かすことが厭だと、今でも此郷人にははれて居る。これでも尙は牛は凡て冷酷無情無神經だといふ人があらふか。

唯彼老異人の劈頭の一語に『一瞬の呼吸に惜しきこととしてけりとありしに單純極まる村人の一群の中にも有繋に心づきし一人の若者があつて早速彼異人を尋ねべく後を追うて遂に十有五ヶ年此郷に歸り來なかつたといふ一條、何れ機會を見て語りもいたさむ。



ウエレーとロイン

エ、コツク

アメリカに生れても、流車も電車もまだ知らなかつた子だち、今頃はどんな悪戯をして居るだらうか。思へば丁度去年の今日だつた。四半人前位なコツクの技を賣りて、カラペラス郡の片田舎に引ッこんだのである。王府より流車六時間の、驛馬にて山深く進むこと五時間あまり、フオアスクロツセングといふ孤村がある。孤村と云ふても形容が勝つて居る。人家は僅か三軒あるばかりだったのである。

暮れてから三哩ほど車にゆられたので、寒さは身に泌みてゐたが、田舎酒屋のストーブ温かく、椅子に身を下ろした時はまことにいゝ心持であつた。薄暗きランプの下に、二つばかりの孫と覺ばしきを抱へて、白髪白髯の老人は坐して居る。その隣れる椅子によりかゝりたるまゝ抱き合ひて眠つてゐる二人の男の子があつた。これがウエレーとロインであつたのである。實は馬丁の奴め、こ

ゝで一杯をきこしめさんとして、下ろしたのだナアと考へてゐた。まだ四五哩の夜路をガタゴトとすゝみゆくことかと思ふてゐたが、老人の言葉にこゝが所謂任地であることがわかり、流石の大膽大夫も自分の迂潤を嘲笑らつた。やがて老主婦も出で、色々話に花が咲いひて、彌々明日からこの家の庖厨をおづかることゝなつた。

主人は三十幾年間小學教師であつたが、職を辭してこの山里に隠れてから十余年息子たちはそれぞれ職を得て他村に住居し、今はこの家には老夫婦と末の娘だけ残つて居るとのこと、その娘も王府の寶石商に働いて居るので廣きこの家はいつも淋くかつたとのこと、田舎人の飾なく故き友にかたるやうに打ちとけて話をしてくるゝ。末の息子は野一つ隔てたるところに家をもつて居たが、この頃嫁女は親里へ遊びにいつたので、その歸りまゝで、二男一女と共にこの家に同居してゐると云ふわけ、夢の中なるウエレーとロインは、かくて余に紹介せられたのである。ウエレーは六才。ロインは四才。

ウエレーは母に似たさうで、面長に美しき子で、額の廣い口もとの締りたる、争ふべからざるアングロサクソンのタイプである。眼の碧く窪みたる、鼻の巧みに高まりたるとは云ふまでもない。ロインは圓顔の福々しく、手足も太く短かいと評すべき方で、笑ふ時は一寸と口を歪めるあたり、見るからに横着な腕白さんの相を具へてゐる。ウエレーはつねねりむつりて、口數もすくなく、一週間ばかりは余にも余り親しまなかつたが、ロインは噤舌の剽輕もので、あくる日より余に抱きついて、ものねだりするやうになつた。唯一つ困るのは、ロインの英語は幼年世界のものであつて、家人の外には一寸と通用むつかしく、二三日のうちはあて推諒で間に合はしてゐた。

自由わがまゝのアメリカにも長者を敬ふと云ふ禮儀は存在してゐる。子どもは雇人に對しても敬語を用ゐる。そして雇人は子どもを呼びすてにする元よりこの國の雇主と勞働者との關係は、主従と云ふ風の臭味をもつて居らぬのであるから當然のことであるが、乳母や下婢などを呼びすてにして

威張りちらした自分の昔に引きくらべて、うら恥かしい想する。悔しいがこの点に於てアメリカが勝つて居ると云はねばならぬ。

ウエレーもロインも、どんな不機嫌なときでも、よしや泣きながらでも、朝夕の御挨拶を欠いたこととはない。何かものを頼むにどうぞと云ふことを添へなかつたら、誰れも子たちを助けぬと云ふ習慣、そしてなるべくはすべてのこと人手を借らぬやうに癖つける。アングル、サムの血潮はこゝいらから活々しくなるのであらふ。二人は一つの室に眠つてゐる。熱のある時か、胃腸でも悪くした時は格別、平生は二人だけに一室の主人ぶりかひがひしく、燻燭を消し、窓かけを閉して、もの靜かに眠るのである。小學校へゆくやうになつても、母様に添臥してゐる吾國の子だちにくらべては、可憐のやうであるが、乳兒の時から習慣であるし、寢具も室の構造も、極めて衛生的にできてゐる故、夜半の注意まで、父母を煩はす必要がないであらふ。夜一と夜父母と離れてゐるため、朝の接吻は一としは濃かなる愛情を味はしむるか

もしれぬ。

神經質なるウエレーは何日も早起である。ロインはどうかすると朝食のすむまでも眠つてゐることがある。ウエレーでもまだ一人では身じまひ出来ぬ。ましてやロインなど衣服を着更ゆる時は、家内の一問題となる。寝まきはシャツとツボンとをくつつけたもので、フランネルでこしらへてゐる。胸はボタンで開いてゐるばかりだから、先づ兩足を先に通して、それから、越後獅子的に据まりて兩手を通すのである。寢臺の敷布團は并の毛屑綿屑製であるが、その上に鴛鳥の羽毛でふくよかな敷布團を用ゐてゐる。その上に日本流の敷布團をしつらひ上布で敷ふてその上にねるのである。かけ布團は毛布二枚ばかりと布團二枚、これをやはり上布でつつみ、上被の眞白さにて飾りふうわりとかける。枕は鴛鳥の羽毛をつめ、白布で更らに上袋を造つてある。二人の起きてくる頃は、酒店の方のストープが盛んに炎をてゐるので、ねまきのまゝ、その椅子に出張する。老人はとうに一方に坐して、眼鏡でしに二人を見つめニヤニヤ笑

つてゐる。ロインはそろそろ文句を云ひはじめウエレーはそばのテーブルから自分の着物を撰みだしてゐる。老夫人もでてきて、孫たちの世話をす。肌着は上下二つになつて、下の方は膝ざりで切れてゐるが、上下をゴムの帯で釣るやうにしてゐる。この釣りかたがむつかしい、余り緊りても心地あしくざりとてゆるきは尙更いけぬ。ロインの文句は中々むつかしい。どうかすると祖父父母のやるのがどうしても氣に入らず、庖厨にかけこんでくることがある。だが吾手で氣に入ることもあるし、氣に入らぬこともある。最後は父のところによく。父のチャレーはか百姓である。鼻聲の文句をだまつて聞いては居らぬ。だまれの一喝で大低へこまして仕舞ふ。ロインの文句は父のもとにゆきては、最終となる。長き靴下をはかせ、腰のところのボタンとゴム帯にて連結する。肌着案が甘く通過しても靴下案が物議を起すこともあるかくてオパーンシャツを着せ、半ツボンをはかせ靴の紐かたく結び、コートを羽織らせ、漸く出来あがるのである。天氣のいゝ時はこの外にカ

「キー色の股引を上にはかせ、肩から釣つてやる。この股引は胸あてと連続してゐる。油屋さんの武装ができたのちは、河原にねころんで泥まみれにならふと、草薙をかきわけて探險をしやうと、勝手次第、寝るまではその武装を解くことがないのである。

顔を洗ふのは二人とも自身にやる、ことにウエレは巧みなものだ、水架に手が届かぬ故、椅子の上で洗面盥を置き、手から顔からシャボンをつけて隈なし浄め、髪をぬらして手つから巧者に櫛を入る。二人とも黄金色髪だ上まことに柔かなる毛だから奇麗に波をつくつて両方にわけられる。ウエレは鏡を見て首を上下左右に動かし髪を梳りてゐる。ロインはシャボンの泡を眉にくつつけて鼻の先ばかり舂りに拭ふてゐる。ウエレは平生でもどうかする拍子に頭に手でも障ると髪がわるくなるとして大心配する子だ、桃割れの鬘をうしる手にいちぢつてゐる日の本のみいちやんやあちやんのやうだ、日本の熟語の所謂ビユーテブル書生さんがコスメチックに苦心慘愴するもかくまでは

と思はるゝほどである。一度ロインに耳のうしろも洗ふやうに言ひつけたら毎日耳のうしろにはカリシャボンをつけて、これでいゝかと聞きにくるには閉口した、これが御縁となりてロインの髪はいつも余が手にわけらるゝことゝなつた。

食卓に就くとき、ロインとウエレと決して并ばせてはいけぬ。横むきとなりてナイフと肉叉にて決闘の真似をするからだ。子たちの皿もカップも小さな可愛らしいのが出来てゐるが、ロインはこの半人前あつかへされるのが不平でたまらぬ。時には小さな皿ではイヤダと力みだすこともある、二人とも乳粥は大好物、ミルクをたつぷりかけお砂糖を自分で入れてゆつくりたべるのだ、祖父さんであれ祖母さんであれこのお砂糖に干渉すると怒つて仕舞ふ、胃を害しやしないかと危ぶまるゝ事もあるが、砂糖が過ぎるとだべきれなくなつてすぐ飽きてくるから自然の要求としてそれを自分で分て加減してミルクの味を損ぜぬやうにして居る。その次に彼等のすきなものはハツトケ！キである。日本の龜の子焼のやうなものに楓蜜をかけて

食するのだ。ロインはまだナイフを自由に扱ひするわけにゆかぬ。傍に居る人誰か小さく切りて與へる、ウエレーは小さく焼いたのを好む、これも細かに切るには一寸面倒だからであらふ、子供には珈琲は害ありて益ないのだからなるべく飲ましたくないが、外の人々が飲むので、我も我もとの請求、いたしかたないから薄くしてミルクを加へ誤魔化してやる、ロインの如きはお茶を加へたのも色さへつけば珈琲だと思ふて飲んでゐる。最初の一月は雨季のうちであつたから二人とも外出できず、應接の間兼帯になつてゐる、例の酒店には悪戯をし喧嘩をはしめて長泣をして皆んなに呆れらるゝを日課としてゐた、音がなと思ふてゐると搖椅子の上で居眠りをしてゐる、老人は口癖のやうにルーソーのエミールを振り廻す、子どもは野蠻人のやうなものだ、野蠻から文明にすゝむ一時期を一生のうちたいみで納めてゐるのだ、喧嘩するのも本然たか悪戯も自然だ、干渉するな罰するな、開發だ誘導だ、この外何等の妙手段があらふと常に云ふてゐる、かくても眼に余る

時がある、赫と怒つて横ツラをなぐつて仕舞ふ時がある、二人の喧嘩するのが面白い、日本の兒だちのやうに組打したり、髪をつかみ合ふたりすることは殆んどない、拳を動かして突き合ふ位のものだ、よろけてみて倒れさうになつた時は敗けたのである、ウエレーは聲を立て、泣くことは稀であるが、一二時間もすゝり泣をした上、半日位不機嫌である、ロインは雷が戸まといひしたやうにうろたへた泣きやうをする、誰れがなだめても中々聞かばこそ、ありあふ物を投げつける、地團太をふむ、殆んど手のつけやうもないが、それもホンの一時のこと、何かのはづみにピツタリ泣きやみ、ニコニコしてゐることもある。三週間ばかりして彼等の母は歸つてきた、乳兒までも姑に托して五週間とか遊んできたとか、アメリカのお嫁さんは暢氣なもんだ。母の歸ると共に彼等の學科は始まつた、毎朝食後三十分ばかりであるが、ソレはソレは嚴格なものだ、レッスンを云ふことが家庭で一種の威嚴をもつてゐる、どんな用事があつてもそれがすむまで

は誰れも傍にゆかれぬ、ウエレーのためには讀本の讀方と書取の時には二十以下の算へかた位のもの、書き方を課して批評し獎勵する時もある、ロインのレッスンは母の膝に抱かれ母の口を見て口まねをするたけだ、Lの舌は齒の間から一寸と顔だしてうしろにひつこみ、Rの舌はあでにとりまゝりて唇を突きだすなど視話法のいろ／＼かくて無心のうちに習ひゆくのである、梅花の魁に春の幕開かれて野の艸は舞臺のカーペット鮮かに雲雀も駒鳥も新曲を奏するに忙はしい、再親愛なる野蠻人君は學科の畢るをまちかねて、戶外にあこがるやうになつた、家のうしろは廣き果樹園である續きたる野には牧場ありて一群の牛は小冠者來れと叫んでゐる、招げばかけよりに小さな手を舐りゆく羊も居る、蝶を追ふて牧草の野をゆけば日ごとくに殖へゆく花のいろ／＼、どこまでゆきても興が盡さぬ、おツかささんがソプラノの引聲にて書餐を報ずるまで歸つてくることはないやうになつた老先生は得意になつてエミールを説いてゐる、ホームには喧嘩もない、泣き聲もない。

戶外に出るには二人とも必ず帽子をいたゞく。忘れてもキャップなしにかけたすことはない、用意周到、キャップはいつとも入口の釘にかけられてゐる、父の命によりて二人とも鶏卵を集める役となつた、百に近き家鶏はその産卵の場所もあちこちと隔つて居る、時には氣まぐれの牝鶏が人目にかゝらぬ叢の中や榎根などに産み落し、その座で鳴いては發覺すると思ふてか、大急ぎで納屋に歸りそこにて鳴いてゐることもある、二人の探險者は果樹園のあらん限りを探索して、この隠れたる寶を得た時は父にもあれ祖母にもあれ賣りつけることが出来るのだ、好箇の運動法であつて、都會の子たちの夢想し得ざる幸福である、集めたる卵を庖厨に納め、かくれたる寶を賣りつけたのち、コツクさん何か下さいとの鼻聲を聞かせぬことはない、この國の習慣として主婦と雖コツクに斷りなしには庖厨から何ももちだすことは出来ぬ、飢ゑたるものは食を撰ばず、昔はハイヤケーキにも時には難くせをつけたものが、今日この頃はプレート一片にバターをなすりつけても欣喜雀躍して舌

敵を打つて居る、二人のエミールは天與の健康を得て居るのだ、百萬の富を傾けるも購ひ得ぬ幸福を得て居る、羨しいではないか。

家鶏と雖一社會をつくつて居る以上はさうさう馬鹿正直に卵を取りあげられては居らぬ、時にはストライキを起して十數羽の翼ばたさずまじく二人を追ひかけるともある、七羽鳥と云ふ野次馬がこれに附加雷同して怪しげな叫びの聲援をなし、

流石の腕白將軍も旗を巻いて逃げてくることもある、かゝる時は二三の忠犬ありて、よく防ぎよく戦ひ逆襲の勝を制することもある。

耶蘇復活祭の慣はしとして美しく彩りたる卵を贈答する、祖母さんの趣向で三ダース位の卵を煮

その殻に水書を寫しつけ、子だちの知らぬ間に果樹園の草原に散布して置いた折しも林檎の花の咲きはこりたることゝて喜び勇んでその彩りたる卵

を拾ふ二人は名書に魂ありてエンゼルの飛びだしたようであつた。

土曜には余と老婦人と彼等の母と三人にて明日のケーキをつくり、パイを焼くなど忙はしい、エン

ゼルもその香に浮れて狭き庖厨に邪魔をすることがある、ロインに至りては焼きあがるまで待つて居られぬ、チョコレートのスパンを替めるやら、ミンスパイの原料を摘むやら、下界の不行儀のあらん限りをつくして、エデンの樂園へ逃げてゆくこともある。

果樹園の花も大かた散りて青梅を窺ふ竿のあぶなげなる頃は彼等もそのホームに歸つてゐたのだ、されど野一つ隔てたるばかり故寢食の外は依然としてわが家のウエレーである、わが家のロインである、庖厨には來ること少くなつたが、献立をきいて形勢優れたりと思へばこちらの食卓に坐りこ

んでゐることもある、わが家は田舎のホタルである、三日に一度位は午餐の客もあるわけだ、老婦人が丹精の菓物など去年密漬せるを穴庫よりとりだして櫻實の紅覆盆子の濃紫、卓上に花と置か

るゝことがある、秘密はいつの間にか野外に漏れて小さな珍客二人、誰れより先に食卓に坐して居る、ウエレーはロインに比して小食で肉類よりはデザートに嗜好を以て居る、ロインは肉類もまた

辭するところにあらず、ステーキなどは余り多く食し得ざるもスチューのようなものなど、大人の婦人などよりも多く平げることがある、思ふに父の衣鉢を傳へてよく働いて飽くことしらぬと云ふ未來の良農はウエレーにあらずしてロインであらう。

夏の休みに伯母さんが歸つてきた、王府にゐる未の娘のことである、芳紀十八、やさしい言葉のうちにとことなく都ぶりのらうたけたる處がほの見ゆる、二人は歡呼してこれを迎へた、ロインは伯母さんよりもそのもたらせるキャンデーを歡迎したのではあるまいか、娘の學友だちも尋ね來り、二人の従妹の少女もその母と共に二三日逗留した戸外は暑さはげしいので一同日かげの樹の下や、廊下などに椅子をうつしてものがたりしてゐる、従妹の少女もわが二人の村童も涼車さへ電車さへ見たことがない、ましてや都の子たちの第一にも眞似する自動車は想ひもつかぬわけだ、箱にのりて綱をひつばらせ、驛馬の眞似をしてゐる、ロインは馬になつてウエレーは御者、客の小女性は

顧客となつてゐる、グラスとさげびて馬を走らせ、ホアと怒なりて馬をといめ、酒店にゆきて麥酒を呑む眞似をなし一同を笑はせた。

五ヶ月目に余は此山里を去つたのであるが、その後處々を流浪してのち。一年ぶりで再びオーランドに歸つてきた、年一ツ殖えたウエレーとロインは今年も驛馬の眞似をして居るであらふか、窓前の揚柳は孤村の去年に似て嫩芽針の如く春まさに三分、都大路に笑ひ興する予だちの聲もさこゆる、うち見れば何れもあどけなきうるはしき子たちであるが、吾には見もしらぬ子だちばかり、ア、わがウエレーわがロイン遇ひたや唯一と目。(三月二十日オーランドにて)



短歌

鈴木永五郎

思ひあまり草堂の徑さまよへばほすきゆらぐ月
白うして
ともすれば胸にもえつる若草の小みちに迷ふわが
思ひかな

加藤たまも

戀を捨てし我行く道を照らすとも見むか細月梅さ
ける宵
白梅や香染め色の袈裟はせる律師がいほにうぐひ
すの啼く

小野春香

したゝかに河水ましてみどりふく柳にけふる春雨
のさと
梅の樓小づゝみ習ふ姫君のさよきみこゑに銀燭ゆ
るゝ

眞末子

うらゝかき空に高なく聲清うひばりさえたり春の
あざわけ

鶯の聲に目さめて窓をせばしら梅さよしありあ
けの月

菅原櫻心

霜の夜を友のかばねに物かたるものゝふすごき太
刀の光りや
うらぶれや冷たかる夜の石にふれて戀も悶も霜と
し凍る

中西欽一

釜の音のたかき一間は炭の香にこもりて床し白梅
のはな
松前や筑紫やむろのうたきゝつ春風二月伊勢の旅
する

朝倉美知

春の日を涙にぬれし緋の小袖さきても花にそえて
送らば
小さきみに女いそげる三條の宵やみくらさ花あ
りかな

春風や京は三十三間の矢こそもはなの香にゆるさ
かな

吉田秋花

うす霞菜の花寺はくれをうつかね重き音に春たけ
にけり
白梅や瑠璃の戸越にはそ月の光りつめたく春まだ
あささ

○ やよひ女
掃きすてし妹か造花のかみくすにそいろ雨ふる春
の夕べや
緋のためと縫ふ子しばしは針とめて耳かたむけり
鶯のこえ

伊藤 緒 刀

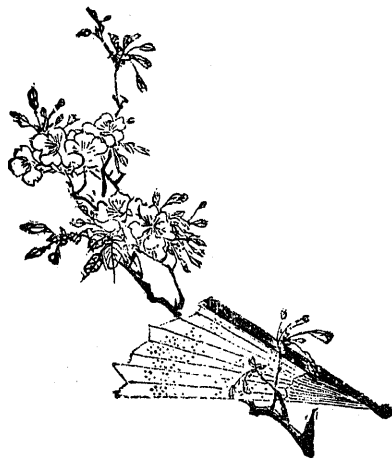
○
たいよへる匂ひくつしき梅月夜舟と岸とに人わか
れぬる
むらさきのたすきあやどり染糸を子せる小女に梅
ちりかゝる

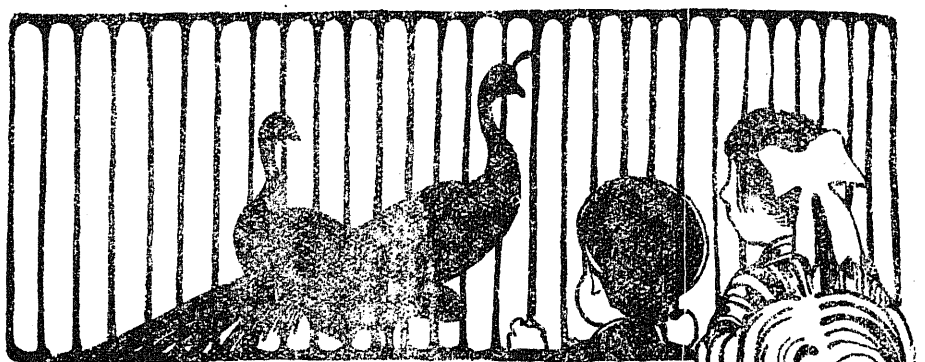
* 鶯の雛塚つさしゆふべより * 起 雲

しめやかにふる春の雨かな
衣白してさざ橋のぼる夢さよし

梅が香たかきあさ月の窓

(投稿歓迎) (題不定) 伊勢白子局區内眞宮宛





泳ぎの太郎

なにがし

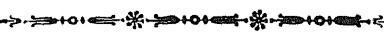
むかし〜或處に太郎といふ小供がありました、太郎には二郎といふ小さい弟がありまして、この二人はめづらしいほど仲の善い兄弟でありました、或日のこと太郎は二郎を連れて海邊にまゐりました、處がこの日は丁度好い天氣で、ぽか〜と暖い日が照つてまことに善い氣持です、見渡すと海の上には波も立たず、わちらこちらには白い帆かけ船や小さな漁師船が一艘二艘また三艘と、まるで白い鳥の翼の様にまた木の葉の様にも見えるのです、そして其海の沖の方は青々と晴れ渡つた大空と一緒になつて、海だか空だかわかりません、ア、きれいなア、きれいだ、あの海は全體どこまであるのだらうしなどと、二人は頻りて感心をして居ましたが、二郎はふと其海邊の岩の陰に誰だか乗り捨て、行つた一艘のボートを見付けました。大よろこびで「アッ兄さんボートがあるよ、ウマイ〜、サア兄さんボートに乗りましよう、乗せて下さい」と言ひました。太郎も「これは善いものが見付つた」といふので直と二人は其ボートに乗りました。太郎は、ボートがなかく上手です。一ツ二ツ一ツ二ツと掛聲をしなが

ゆる／＼と漕いで、だん／＼沖の方に出て行きました。沖に出て見ると其景氣の美しい事、海邊で見ただけよりも一層です。今まで前の方だと思つた漁師船は、いつの間にか後になつて居ます。小さいと思つた白帆がだん／＼大きく舟までも見える様になつて來ました。走るは汽船か軍艦か泊るは漁師の釣船か……など、二人で聲を合して唱ひますと、其歌が、ヒロ／＼とした海の上をどこ迄も、聞えて行く様で、其善い氣持つてはありませぬ。處が向ふの方に誰が乗つて居るのですか同じ様なボートが一艘見え出しました。なかく早く漕いで居る様です。「兄さん、あのボートと漕ぎつこをしましやうや」「ア、そうだそれが善い」と、太郎は大急ぎで力一ぱい漕ぎ出しました。「二郎も側から、一生懸命「サア、早く／＼」といゝので、二人はもう一緒になつて、ヨッシ／＼と掛聲ばかりをして漕ぎました。しかし向ふのボートも矢張一生懸命と見えてなかく早い、二人はまるで夢中です。處が不意にドーンとひどい音をして二人のボートはさかさまにヒツクリ返りそうになりました。

四十二
ボートは海の中につき出て居た大きな岩にブツカツたのでした。ハツと思つて太郎はボートにつかまらなかったが、漸くしてふと見ると、ボートの中に二郎が居ません。サア大變、二郎は海に落ちたのです。太郎は直ぐ着物をぬいで飛び込みました。二郎はとあちこち尋ねましたけれども其邊には見えません。「帽子も着物も見えませんが、二郎さん次郎／＼」と呼んで見ましたが、返事もありません。太郎は困まりましたか、でもどこかに二郎の居らない筈はない、どうしても探さないではといふので、これから太郎は海の中をだん／＼と泳いでまゐりました。そして、大きな聲をして「二郎さんは居らないか、太郎の大事の二郎さん、二郎さん、二郎さん」と申ながら泳ぎました。づん／＼まゐります内太郎は一番に鯛に出くはしました。眞赤な顔をして大きな鯛です。太郎は若しかと思つて「鯛さん／＼、お前は二郎を知らないか」と訪ねますと鯛は白い歯をむき出して、「知らないよ」と怒つた顔をして行つてしまひました。次には鯖に出くはしました。すました顔をして之も可なり大

きな鯖です。太郎はまた「鯖さん〜、お前は二郎を知らないか」と申す、「やはり知らないよ」と言つたきりて、ずん〜行つてしまひました。今度は鯉に遇ひました、鯉は黒青の着物をきて、なか〜元氣です、太郎はまた「鯉さん〜、お前は二郎を知らないか」と申す、鯉は正直そうな顔をしてお前の大事の二郎さんは乙姫様のか小使と申した、太郎は何のことだか少し分らないと思ひましたが、乙姫様といふは龍宮城に居らツしやると聞いたから之はさつと二郎も其龍宮といふ所に居るに違ひないと思ひました又方一つはい泳いでまゐりました、もう何程来たか分らないと思ふ頃にふと眼の前に美しいお城の様な所が見えました、繪で見た唐門や珊瑚の柱や鵲の屋根やどうも眩しい程のきれいさです、之こそ龍宮といふ所に違ひない、と太郎はよく〜見ますと其立派な唐門の側に章魚入道が立つて居ます。これは門前らしい、一つ聞いて見やうと太郎は急に氣を苛つて「章魚さん〜、此處は何といふ所、お前は二郎を知らないか、と申しました。

章魚は得意そうに大頭をふり立て、「太郎よ此處は龍宮だ、二郎は私が拾つたから乙姫様のお小使にしてしまつたよ」と申す、太郎は始めて譯がわかりましたが、何しろまあ善かつた、二郎は無事だ、と安心をして、しかし章魚さん私は二郎の兄だから、どうか返して下さい」と申したか、章魚は「いけな〜、たいではどうして返さない」と申す。「それではどうすれば善いのです」と申す、「私と泳ぎつくらをしてお前が勝つたら返してやらう」と申した、太郎は仕方ありません。ではといふので章魚と泳ぎつくらをいたしました。處が章魚は八つ足で、それに格別大きな章魚でしたから、どうして太郎は叶ひません。いつの間にかずん〜追ひこされてしまひました、呼んでも影が見えなくなつてしまひました仕方がないから太郎は泣く〜元の道を泳いでたい一人は〜として家に歸りましたが、サア太郎は之からどうしても泳ぎを上手になつて、あの章魚に勝たなければなりません、朝から晩まで泳ぎの稽古をして脊中や手足の皮までものはげる様に



なりましたが、決して廢めません。誰が何と言つてももう一生懸命になつて泳いで居ました、するとえらいものです。其太郎の上手になつた事誰だつて叶ひませぬ。まるで河童の體です。それで皆は太郎のことを「泳ぎの太郎」「泳の太郎」と言つて感心する様になりました。そこで、もう大丈夫だらうと泳ぎの太郎は是から二郎を取返しにまゐりました、何時かの海の中を又ずん／＼と泳いでまゐりましたが、今度も鯛だの鯖だの鰹だの、まだいろ／＼の魚に遇ひましたが、皆太郎のわまりうまく泳ぐのに驚いて見て居ました。

さて、また美しい龍宮城につきましましたが、見るとやはりいつかの章魚が門番をして居ます、うれしくて太郎は「章魚君、今日こそ大丈夫だよ、早く泳ぎつくらをして二郎さんを返したまへ」と大した元氣です。章魚はどうも此間とは大分ちがうと思ひましたが、仕方がありませんからではそうし様と一ツ二ツ三ツで泳ぎ出しました。

「どうも恐ろしく善く泳ぐじやないか、彼は何だらう」でも章魚には叶はないだらう「いや大分早

い様だよーなどと先程の鯛だの鯖だの鰹だのがみんな寄り集つて来て見物をしました、乙姫様も何だか騒がしい様だと思ひになつて城のお天守から御覽になつて居ます、章魚は尙更一生懸命どうでも勝たなければと例の八つ足ですむぶん早く泳ぎましたけれども、どうして、泳ぎの太郎には叶ひませぬ、しまひには氣をいらつて、其足で太郎を巻き付け様としましたけれど、もうずん／＼行つてしまつて、とう／＼太郎の勝になりました、萬歳々々と言ふ聲が方々から聞えます。「章魚君サア約束だ。返したまへ早く」と申ますと、章魚ももう降参してしまつて、それから夜も輝く奥御殿へ行つて乙姫様にお話をして二郎を連れて来てくれました。「ヤア二郎さん」「アツ兄さん」と二人は抱へ合つて喜びました。そこで太郎は二郎を抱へたまへで泳ぎまして章魚を始め鯛鯖鰹などを、みんなに送られて、もう／＼お家に歸りました、そして乙姫様から感心な兄弟だと言つて下さいました金銀珊瑚など立派な寶物を澤山持つて歸つてお土産にしましたとさ。めでたし／＼。

フレベール會發行

幼稚園遊戯

定價 金四拾錢
會員特價參拾錢

郵稅四錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてあります。世の幼稚園に關係せらるる方々は是非一本を座右に備へられんことを望みます。

尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼児用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるる保育要項とを附録として採録致しました。

フレベール會發行

幼児談話材料

定價 金四十錢
會員特價參拾錢

郵稅四錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼児教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼児の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼児に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼児教育に關係して居らるる方は是を標準として作話せられんことを希望致します。



行發會ルベール内校學範師等女子女

もど子と人婦

本領

家庭の經營は六ヶ敷いもの、理想の家庭はなかく實現し難いものであります。併し現在の家庭は國家の爲めに益改良し行かねばならず、如何にせば最も完全な家庭を得可きかと云ふことは社會の進歩と共に益研究し行かねばなりません。そこで家庭研究と云ふことが頗る趣味ある難問題となる次第であります。

本誌は此必要に應じて着實な思想と穩健な主張とを以て真正な家庭生活の意義を明にし世の家庭教育、女子教育に向つて、適切な科學的解決を試み様と努めて居るのであります。殊に家庭教育幼児教育に就ては他に斯界の指導となる可きものがありませんから本誌は進んで本邦に於ける幼児教育界の木鐸たらんことを私に期して居る次第であります。

育児に眞面目なる世の父兄並に幼児教育に關係せらるゝ請讀諸君は奮つて御講讀あらんことを願ひます。手續は表紙の第二頁に御座います御覽下さいませ。

* * * * *

